

仲間と親とあゆみ続けて

32年間の障害者福祉実践

第6回 運動の原点と私を支えた考え方

全国初の作業所「ゆたか共同作業所」

1968年4月、現在の「ゆたか作業所」の前身となる「名古屋グッドウイル工場」が名古屋市南区に誕生しました。その年の8月に大阪で開催された全障研全国大会（第2回）の労働分科会でそのことがレポート報告されています。名古屋グッドウイル工場では知的障害のある人たちが働き、ジャズドラムの組み立て作業を中心に仕事が開発されていましたが、1969年2月に名古屋グッドウイル工場の親会社が倒産。1年足らずで閉鎖することになりました。しかし、当時働けないと言われていた障害者が働くことができるということ、仕事を通して成長や発達の事実は、親や関係者の確信となりました。今後どうしていくか、話し合いを重ねた末、閉鎖から1ヵ月後の3月16日に全国初となる障害者の通所作業所「ゆたか共同作業所」として出発することになったのです。

対市交渉で勝ち取ってきたもの

その年の7月に、助成を求めて第1回対市交渉が行われました。この時は名古屋市にその存在すら無視された形に終わります。しかし、そこで引き下がるわけにはいきません。翌年1970年2月には愛障懇（愛知県障害者（児）の生活と権利を守る連絡協議会）の前身）の対市交渉に仲間と関係者20名で参加。「ゆたか」をつぶさないで。市はお金をください」「大きな工場がほしい。寮もほしい。風呂もほしい。みんなで食べられる食堂もほしい」と仲間たちが発言。12月の交渉では「市がやらなければならないことをやってみる。具体的助成の方法はありませんが、社会福祉法人にさえなれば、方法は考えられる。名古屋市として、『ゆたか』さんに学んで市立の授産所をつくる計画です」との返事をもらうこ

とができました。

1971年5月の交渉の時、当時は廃品回収やバザーをしても赤字続きで、職員の給料は遅配が当たり前の状況でした。マイクロバスの車検料について若者会（仲間の会）代表が執ように食い下がったため、「マイクロバスの車検料については名古屋市が責任をもつようにしたい」という発言を得ることができ、社会福祉法人認可に向けての補助金も付くようになりました。そして1972年、社会福祉法人ゆたか福祉会が設立し、ようやく認可施設「ゆたか作業所」としてスタートをきったのです。50年前の話です。

後に公私間格差是正の補助金の運動を組合団体と共同して進め、愛知県の補助金がつくようになり、職員に公務員に準ずる給料が支払われるしくみが整っていききました。

折しも1973年4月、養護学校の不就学をなくす運動の先頭に立ってきた本山政雄さん（名古屋大学名誉教授）が名古屋市長選に立候補し、当選。3期12年間の革新市政が続けられました。この革新市政のなかで障害者医療費無料化（1974年）が実現。また、市バスで家族といっしょに作業所に通所した際の、家族の帰りの運賃を市が出すという「付き添い交通費」の制度ができ、障害者にやさしい市政が開発されました。ちなみに名古屋市の市バス・地下鉄の無料バス券（本人と付き添い）は1971年から開始しています。

運動の中心を担う経験から

こうした経過があるなかで、8月号で書いた、1999年



2015年秋 日比谷公園で行なわれた「25条大集会」デモ行進の出発待ち

12月に出された愛知県の補助金3割カットの動きはあまりにも急でひどすぎるものでした。愛知の障害者3団体（きょうされん愛知支部、愛障協、全障研愛知支部）として共同して運動をするのは27年ぶりのことになりました。

私にとって、県に向けた請願署名づくりや議員まわりも初めての体験でした。当時は作業所職員の仕事と同時並行で進められ、唯一の休みだった日曜日にも署名活動に出かける日々。県や市への請願行動には有休を取って参加していました。家に帰るのも夜中遅くなる日が続きました。しかし、障害者運動をやめようと思ったことは一度もありませんでした。



ゆたか希望の家相談支援事業所

佐藤さと子

さとう さとこ／日本福祉大学卒業後、社会福祉法人ゆたか福祉会に勤める。全障研愛知支部事務局長